

2012年 和本で見る書物史

第14回 和本の保存

はしぐち こうのすけ
橋口 侯之介

和本入門 第4章

千年もつ素材

書籍によく用いられた紙は楮を原料とした和紙である。軽くて柔らかいが、こしがあつて粘り気もある。そのため物理的な実験では千回繰り返し曲げても復元した。落としたり、コピーをとったりしても問題はない。いっぽう、雁皮を原料とした紙は素敵な紙だが、もろさがあるので、折り曲げないように慎重に扱う必要がある。いずれも千年もってきた。あとをきちんと守ってやればよいのである。

製本もシンプルであり、素材に高価なものはない。革製のヨーロッパの本に比べて重厚さこそ不足するが、このシンプルさのおかげで、メンテナンスが容易である。少々こわれても個人で直せる。そうして直し直しして皆が伝えてくれたのである。

オーラは本物からしか出ない

オリジナルの和本には、和紙の柔らかい手触り、軽くて華奢なイメージながら丈夫な素材、しっとりした日本の風土にあった湿り気、安定した墨の色、けっしてどぎつくない中間色の多い絵の具の色などがある。癒し系なのである。そこから書物特有のオーラが出てくる。ふだん入手可能な江戸時代の和本でも二、三百年経ている。その歴史の重みと素材がそうさせているのである。これは複製本からは出てこない。大量出版される現代の本にもない。まして電子書籍にはまったくないものである。和本は、だから手にとって見てほしい。感触を味わってほしい。

本を伝える仕事

和本の特徴は、その寿命が長いことである。1冊の本を一人が独占して、それでおしまいということはなく、回し読み、貸本、読み聞かせなど複数の人が見るし、さらに幾世代にもわたって伝存されていく。江戸時代の本屋の仕事は出版し、新刊として本を売るだけでなく、古本屋・貸本屋でもあった。売った本を下取りしたと考えれば古本屋でもあったのだ。今の新刊書店は絶版になったような本や古い本は店に置かないが、江戸時代の本屋は、新旧取り混ぜて売っていたのである。

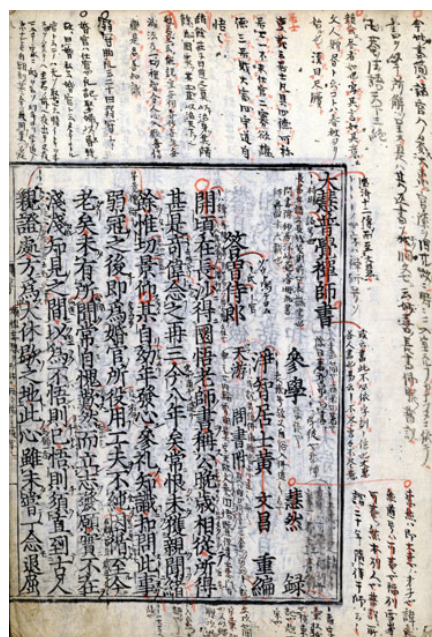
本屋のというのは、新しい本をつくりだすことと本を伝える仕事を同時にしていたのだ。

この感覚は、本屋だけでなく蔵書家も同じだった。地方の庄屋の家には本がたくさんおいてあり、村民が自由に読めるように図書館の役割も果たしていた。

現代、売れ残った本は大量に廃棄され、多くの人がいらない本は捨てている。それと事情が異なっていたことを知るべきだろう。

書き入れという作業

現代の本に線を引いたり、ボールペンで何か記入したうな本は、古本屋は引き取ってくれない。次の顧客がいやがるからである。中には書き込みはないでしょうね、と念をおされてしまう。しかし、和本は逆である。しかるべき読者は、しかるべき書き入れをして良いのである。そのために和本は下よりも上部に空きを



『大慧普覚禪師書』という禅宗の本。欄外にびっしりと書かれたのが注釈。さらに本文の固有名詞を示す赤線が引かれる(朱引)

多めにとって印刷する。ここをかしらといって、頭、首などという。難しく鼈頭(ごうとう)ということもある。鼈というのは亀の妖怪で、知識の神の化身でもある。書き入れというのは、校正や注釈をすることで、それを利用することで後世の読者に役に立つ。そのために書き入れにもルールがあって、それを守るものである(朱引、『和本入門』p208 参照)。書入も本を「残す」ための大事な作業のひとつである。

保存と利用の並立を

ところが古典籍ということで、一部に誤解がある。貴重な「文化財」だから一般人は触ってはいけない、コピーをとったり撮影することもいけない、と図書館や博物館では「貴重書室」に仕舞いこんでしまう。公開より保存に力点が置かれていて、和本というだけで貴重書あつかいになってしまう。それでは一体何のための本だろう。

保存と公開(=ガラス越しの展示でなく、手に触れて利用できること)は両立しなければならない。本当に文化財として保護していくべき対象の貴重書と「現役の書物」として利用してよい本を区分けすればよいのである。そのためには本に対する価値判断をする知識がいる。それを学んでほしいのである。次の時代にただ無難に申し送りするだけでなく、現代における責任をはたすべきだろう。

保存は現代人の義務

これまで千年の歴史がある本でも、さらに千年保存していかなければならない。個人のレベルでも和本の保存につとめるべきである。

最大の敵は本に対する「無知」で、こんな「きたないもの」「古くさいもの」で捨てられてしまうのが困る。その次の難敵は「虫」である。フルホンシバンムシという小さな虫(頭から尻まで3ミリ程度)の幼虫が和紙を好んで食べる。衣服につく虫と違い種類だが、放っておくとどんどん穴をあけてしまう。



せっかくの本をシバンムシに食われて台無しになる



幼虫の長さは5mmくらい

フルホンシバンムシの親(上)と幼虫(下)。初夏の頃に成虫になって飛び出す。その後、雌だけが本に戻って卵を産む。そこからかえった幼虫が一年間、食欲に紙を食べるのである。

この虫の害から守るために昔から「虫干し」をしてきた。初夏の湿気の少ない日に本を棚や箱から取り出して外で陰干しする。湿気を取り、虫が入り込むのを防ぐ効果があった。

しかし、いったん本の中に入り込んだ虫はやっかいである。せつせと追い出す作業が必要だ。そうでないと彼らは食欲に紙を食べるのである。

いよいよ困ったときは、電子レンジの世話になる。楮の紙なら大丈夫。

和本リテラシー

国文学者で書誌にも詳しい中野三敏氏は、現代人が自国の古典が読めなくなっていることを嘆く。明治期に仮名を今の一音一字に固定してしまったので、「変体仮名」が読めない、くずし字を読み書きする訓練もしなくなったので、それも読めない。これでは鑑賞ができない。和本を読む力=和本リテラシーの向上を提唱している。その著『江戸文化再考』(2012, 笠間書院)の一読を薦める。